

明治初期翻訳小説『欧州花柳春話』における恋愛と結婚

前野みち子

名古屋大学国際言語文化研究科

〈序〉

文学史上、近代初の政治小説をどの作品とするかについては様々な議論がある。昭和十年に大部の『政治小説研究』を著してこの分野の研究基盤を確立した柳田泉は、戸田欣堂の『民権情海波瀾』(明治十三年)をもってその一応の嚆矢としている。しかし柳田は、その二年前に出た翻訳小説、リットン¹作／丹羽純一郎訳『欧州花柳春話』が多くの青年読者層の心をつかみ、『政治小説』とは決して言えない内容でありながら、のちの政治小説の興隆に大きな影響を与えたことを認めており²、これは今日ほぼ定説になっていると言つてよい。本発表では、リットンの意図からすれば本来「教養小説」と呼ぶべき作品「Ernest Maltravers」(一八三七年初版)とその続篇と見なされる「Alice」(一八三八年初版)の翻訳(抄訳かつ創作に近い部分も多い)³が、西南戦争の翌年、日本が近代化に向って邁進し始め、洋学が圧倒的な勢いを得ていくまさしくその時代に、『花柳春話』といういかにも旧態依然の人情本的タートルを付して出版され、なぜそれほどまでに当時の青年たちに競って読まれたのか⁴という問題に注目し、その理由を主として旧士族およびその周辺の青年たちが抱いた「青雲の志」と、新しい(欧米的)男女関係・男女交際の関心とが交差する地点に探ってみたい。

1. 原作の概要

まずリットンの原作の概要を紹介しておこう。富裕商人の息子マルトラヴァースはドイツでの遊学から帰国して荒野で道に迷い、あばら屋に宿を借りるが、その主人は深夜彼を襲って金を奪おうとする。これに気づいた娘アリスが彼を救い、翌日彼女も父の元から逃げ出して彼と再会する。アリスの美しさと素朴で純真な心に興味を覚えて、マルトラヴァースは偽名を名のりアリスを教育するが、次第に愛し合うようになって結ばれる。やがて彼は父の重病を知り単身家に戻るが、その間にアリスは強盗に連れ去られる。アリスの行方不明と父の死によってマルトラヴァースは生来の孤独癖を募らせ引き籠もって暮らすようになるが、彼とは対照的に世俗的野心にあふれた青年ラムリの誘いで外遊の旅に出る。数年後、イタリアに滞在中に主人公は社交界の華ヴァンタール夫人に出会い恋をする。年上の彼女はこの恋に抑制的な態度で応じ、好意を示しながら若者の熱を冷ます。イギリスに帰国後マルトラヴァースは著述生活に入り次第に評価を得るようになる。それでも彼は世間を嫌悪し、なおかつ「有用で偉大な目的」を実現しようと志す観念的な夢想家である。この時期、彼は一種の自己克服のために出入りした社交界で聡明なレディ・フローレンスと知り合い、同様

に世間の偽善を憎みながら活動的生を勧める彼女と婚約するが、ラムリの嫉妬と陰謀からフローレンスの誤解を招き結婚には至らない。フローレンスは後に自らの非を悟り、取り返しのでない事態に憔悴して死ぬ。さらに主人公はこれ以降、カメロンという娘と親娘と知らずに恋に落ちるが（これは最終的に父娘でなかったことが分かる）、アリスが生存していることが明らかになり、やはり自分にはアリス以外の伴侶は考えられないことを悟って求婚し、彼女はしばらく考えた後に結婚に同意する。

2. 訳書のタイトル／校閲／題言

リットンの原作が主人公の名前をそのままタイトルとしているのに対し、訳書のタイトルが含む「花柳」は江戸の、そして明治に至っても長く続いた遊里の伝統を強く指示している。また、「春話」も為永春水の『春色梅児誉美』を筆頭とする江戸末期の人情本的風俗世界とのつながり、そして中国風才子佳人小説の世界とのつながりを想起させる。たとえ江戸的なニュアンスを消し去ったとしても、「春」という漢字自体が東洋的文脈で捉えられた男女関係一般を共示することは間違いない。東洋的典型に従う女主人公たちは、人情本でも才子佳人小説でも、そのほとんどが花魁、芸者、妓女であり、主人公との恋愛を貫いて結婚することが困難な状況にある（明・清代には良家の子女でありながら数奇な運命を辿る佳人も登場する）。彼女たちは場合によって素生正しい生まれであり、多くは貧困によって苦界に身を沈めるが、誠心誠意の「情」を持ちつづけることよって読者の同情と共感を誘い、最後にその真情が報われたり、報われずに悲愁の結末を迎えたりする。しかしここで忘れてならないのは、市井の男女の恋の葛藤を扱う人情本と才子佳人小説に登場する男性主人公の社会的地位の相違であり、前者は丹次郎に代表される町人風の色男、後者は才子、すなわち科擧の試験に合格して士大夫となる知識

人階級の予備軍、日本に置き換えるならば立身を目ざして学問に励む士族階級の出自である点がはつきりと異なっている。前者の丹次郎は物語を通じて自らの社会的地位の上昇を目ざさない（町人は職人にせよ商人にせよ固定した身分であり、士族の落胤であることが判明し丹次郎の身分が上昇する結末は^{デウス・エクスキューサ}機械仕掛けの神による安直な大団円である）が、後者においては、多くは低い身分の佳人との恋が、青雲の志を抱き、いまだにそれを実現しえない才子にとって結婚への二重の障碍となるのである⁵。

さらに、『花柳春話』のタイトル右側に訳者の名と並んで印刷された「服部誠一校閲」という文字も、当時の読者に並々ならぬインパクトを与えたはずである。服部誠一（撫松）は、東京の開化・新風俗を活写した『東京新繁昌記』によって一世を風靡し、著名人のゴシップ記事や花柳界情報を満載した漢文雑誌でも名を売った開化の時代の寵児だった。創意に富んだ自家製変体漢文を操る彼に同時代から猥褻・猥雑を非難する声も多かったが、三木愛花によれば、当時「福沢氏の西学鼓吹に関するものと假名垣氏の戯作読本以外に属する漢文体、若しくは漢文崩しと称せる漢文直訳体の出版物、特に情事に亘るもの翻訳小説に類するものは、服部氏の校閲又は序文を請ふを以て書肆の希望条件の一つ」であり、当人の許諾なしにその「校閲」や「序文」を騙ったものも少なくなかったという⁶。この三木の言葉は、西学Ⅱ洋文脈、戯作Ⅱ江戸的和文脈、情事／翻訳Ⅱ漢文脈という明治初期に並存した文体とその用途の関係を巧みに言い当てている。

さて、書肆の店頭で撫松校閲のこの本を手にとった読者は、表紙と中扉をめくって「題言」を読み、その末尾に「柳北仙史」の文字を目にしますます購買意欲をそそられたに違いない。高度の漢学知識を駆使した漢詩や諧謔に富む風刺文によって明治前半の三大新聞の一つ『朝野新聞』の一時代を画した成島柳北は、出自も学識も撫松とは比較にならない筋金入りの反骨風流

才子として知識人の間に盛名を馳せ、やはり多くの出版物に校閲や序跋を求められた人物だった。

とすれば、『花柳春話』という翻訳小説は間違いなく一定の意味方向をもって当時の読者にアピールしたことになる。幕末に二本松藩校教授を勤め、廢藩置県以前の明治初年に「公用人ト為リ東京ノ藩邸ニ勤務」した地方人服部の卑俗な我流変体漢文と、將軍の侍講を勤めた生粹の江戸子漢学者柳北の洗練された風刺漢文は好対照をなすものと見られたが、いずれにしても、彼らは幕末に儒者―士族として生き、明治政府となつてからは仕官することなく（柳北の場合はその懇請を断つて）、新興ジャーナリズムの世界で漢文に拠つて生きた人々だった。そして、イギリスからの帰朝法学士丹羽純一郎の手すさびの翻訳『花柳春話』もまた、巻頭を飾つたこの二人の読者層と重なる知識人たちを念頭において、漢詩文に見られる難解な漢語を多用する漢文直訳体（漢文訓読体）を用いて訳出されたのである。

3. 漢文脈的「情」の意味するもの

それではこの「漢文直訳体」の訳書は、リットン原作に見られる男女間の情をどのように翻訳したのだろうか。あるいは情念の漢文的拘束は西洋の「情」の翻訳にどのような影響を与えたのだろうか。この問題を考える上でまず、「情」という概念の彼我の差を分析しておかなければならない。

柳北はその「題言」において、「多情無比ノ溫柔郷」（遊里）を人はなぜ「花柳」と呼ぶのか、と問い直す。本来「情」のない「花」や「柳」に「情」を見出すのが「人ト生レシ者」本来の姿であり、「全地球上一切情界ノミ」である。にもかかわらず、「固陋學士或ハ云フ。泰西諸國ハ。人々実益ヲ謀リ。実利ヲ説キ。敢テ風流情痴ノ事ヲ問ハズ」と、柳北は西洋かぶれの知識人の鼓吹する偏頗な、「情界」を解さぬ実益・実利主義を嘲弄する。「是レ極メテ

妄誕。余嘗テ航遊一年。親シク看破シ来ルニ。彼我ノ情相契ス。毫モ差異無キナリ。」さらに彼はこの翻訳を「情史」と見なし、「江湖ノ情痴者流」は先を争つてこれを読むだろうが、「彼ノ固陋學士」は「誘淫啓蕩ノ具トナル而已」として「情史」の害悪を難するだろうと皮肉つた上で、この書の最終的な判断を「世上ノ才子」に託している（傍点は筆者）。

柳北の「花柳」への言及はもちろん丹羽の訳書のタイトルを意識してのものであったろうが、花柳的「情」を様々の「情」の一つではなく情一般と見做すところに、風流才子の日本的（あるいは江戸的）文脈があった。そもそも原作では遊里とはまったく無縁の女性たちと主人公との恋愛が語られており、その翻訳タイトルに「花柳」という語を選んだ（あるいは書肆の提案に同意した？）丹羽の立場そのものが、柳北の「情」の捉え方を共有している。そして丹羽自身もまた、当時はまだ稀少の帰朝法学士、つまりはバリバリの実学洋学者として官途に就くことが期待されながら、はつきりと「情痴者流」の側に与した人物であり、「常に黒縮緬の羽織を着流し、ぞろツとしたる身装にて狭斜の巷に出入り」していたことが知られている。

「花柳」とはすなわち才子が「情」を交わすべき、そしてそのために家父長制度の外側に、しかもその認可の下で困い込まれた女性たちだった。「花柳」の語源は李白の詩であるとも他の漢詩人の詩であるとも言われるが、いずれにせよ元来中国の詩語として、遊里の妓女、芸娼妓を意味する。これに反して、家父長制度の内側に困い込まれた未婚・既婚の女性たちが原則的に風流な「情」の対象とされなかったのは、儒教的倫理に基づく社会が「齊家」を実現するための方便として女性を二種類に分け、それぞれを家父長制度の枠内外に配置したからである。この制度的枠組みを守る形で漢詩の世界に成立したのは夫婦の「情」を基盤とする「閨怨詩」だが、制度の内側にいるこれらの女性たちの方は「花」や「柳」であつてはならなかった。柳北が私

信で妻を「荆妻」と呼ぶように、漢文脈における妻は「荆」のかんざしと木綿の裳裾を着けて、「女大学」に教えられるように控え目で慎ましくあることが義務づけられた。遊里（悪所）の女性たちはこれとは対照的に、制度によって公然と保障された境界内で華やかに「美」を競ったのである。このような事情はキリスト教の支配する近世までの西欧においてもそれほど異なるわけではない。しかし、リットンが活躍した十九世紀半ば以降のイギリスを中心とする新教諸国では、キリスト教モラルが近代中産市民社会に合せて改変され、結婚を目ざす男女間の「情」は、様々の内的規制や思惑はあつても、当事者にかんがりの裁量を許すものとなつていた。小説に描かれた男女関係もまたこのことをはつきり窺わせている。

それにもかかわらず柳北は、自身の在欧体験に照らして「彼我ノ情」に差異はないと「情」の全地球的普遍性を主張し、その具体的内容に立ち入ろうとはしない。柳北の念頭にあつた「彼」（ヨーロッパ）の「情」が歓楽の都パリ体験を西欧全体に敷衍したものとすれば、後述するように、リットンの原作はイギリスとフランスの男女観・結婚観の相違を意識的しており、丹羽の翻訳からもそれが読み取れる。したがつてこの点に関する柳北の認識不足（これは開化後間もないこの時期には当然ともいえるが）は覆い隠しようもない¹⁰。のだが、このコスモポリタンの「情」の主張にはもう一つの意図が隠れている。それは、西欧の実学を重んじる「固陋學士」、すなわち福澤諭吉や明六社に代表される「洋学者流」に対する風流才子の側からの揶揄であり、自らの立場を「情痴者流」と貶め、かつ、誇る柳北一流の、やはり江戸的な反骨レトリックである。つまりこのレトリックが彼我の「情」の置かれた社会的・文化的文脈の差異を一気に超越しようと考へたところに、明治維新を迎えて「無用の人」となることを決意した柳北の「情」の限界も存在していた。

「情痴者流」の才子にとって佳人は常に「花柳」の里に住まい、「情」は

風流の遊びと共にあつた。風流才子は「情」を遊びの世界に求め、それを自ら「痴」と見做すその斜に構えた距離の取り方において初めて江戸的な「いき」の理想を実現しえた。柳北に代表される明治初期の「才子」は、幕府仕官時代の公的士大夫意識をジャーナリズム成立期の在野の公共意識へと転形させつつ、士大夫階級が伝統的にもつ私的側面、詩歌管弦による士大夫間の交流の場に、いまだ江戸的風流の価値観に基づく遊里の「佳人」を不可欠としていた。

それではこのような「情痴者流」の解する「情界」と「情」に対し、「固陋學士」と名指された「洋学者流」は、男女間の「情」をどのようなものと捉えていたのだろうか。『花柳春話』が世に出た時代のジャーナリズムの大トピックに、妻妾をめぐる論議があつた。事の発端は明治八年に、「洋学者流」の急先鋒森有礼が『明六雜誌』に五回にわたつて連載した「妻妾論」である。政府の要人も含めて当時広く行われていた畜妾の慣習と妻への非人道的扱いに異議を唱え、妾の廃止を強く訴へたこの論に対しては明六社中からも賛否両論が出たが、福沢や中村正直などイギリス風市民社会とその道徳の実現を目ざした人々は当然ながら賛成派に回り、その後も一夫一婦制の近代性と合理性を説いて活発な啓蒙活動を行った。この問題をめぐる司法当局の対応の右往左往¹¹や服部撫松などを中心とする新聞・雑誌での戯文問答を経て、家族制度を律する「旧刑法」から妾に関する条項が削られたのは、『花柳春話』の出版後二、三年を経てのことである¹²。

森が「夫婦ノ交ハ人倫ノ大本ナリ」と主張し、福沢が「人倫の大本は夫婦なり」（中津留別之書、明治三年）と主張するその言葉にはいまだ漢文脈の「齊家」思想の響きがはつきりと聞き取れるが、「洋学者流」の一夫一婦制は婚姻関係の外に妾や「花柳」の存在を許さないという点で西欧の開化をアピールしていた。福沢は欧米人が眉を顰める当時の高級官僚・実業家たちの「花

柳」を不可欠とする宴席とそこでの醜行をしばしば批難した¹³。花柳的風流と結びついた「情」はもとより西欧の実学を重んじる「固陋學士」の忌むべきものだった。欧米風の近代的夫婦の実現を図った「洋学者流」は、自由意思に基づいて結婚した夫婦の「情」が相互に培われることを要請し、そこに近代化への足掛かりを見たのである。しかし彼らはこの「情」が結婚に先立って培われるべきものであり、結婚に際しての自由意思とはこの「情」に基づく意思であると考えていたわけではない。儒教的制度によってなおざりにされてきた女子教育の必要性は、森においては賢母の育成のために、中村正直においては「好性情ノ母ヲ得テ結好ノ兒子ヲ造ランコトハ……現今人民ノ性質ヲ改造スルヨリ容易キ業」であるとして、日本を「開化ノ域ニ進マシメン」がために主張されている。それは夫婦という絆そのものに価値を認め、その重要性を説き、その「情」を培うに寄与するものではなかった¹⁴。両性の相互的愛情を前提とする恋愛→結婚型の「自由結婚」への関心はむしろ、明治十一年に『花柳春話』がベストセラーになるに及んで漸く青年知識人層（書生層）の関心を惹く現実的な大問題となった¹⁵、あるいはこの翻訳によって初めて彼らは西欧的男女関係と「情」に基づく結婚に関する具体的な知識を得ることになったように見える。それはあくまで漢文直訳体に移し換えられた、つまり撫松と柳北の倍音をも伴う西欧的「情」であったが、だからこそ漢学の素養をもつ世代に理解しやすく、我身の直面する問題として意識された。つまり、洋文脈は漢文脈を経由して日本の知識人読者層の「情」に訴えるものとなったのである。

西欧的「情」の輸入をめぐるこのプロセスは、明治初期に西欧の学問に必要な学術用語が漢字からの造語あるいは既存の漢語に新たな意味を込める転用によって初めて成立した事情とある程度までは重なっている。しかし、西欧的「情」の漢文体による輸入と学術用語の漢語による輸入には歴史的に

見て明らかに異なる側面があった。すでに古代から漢語を通して学問を發展させてきた日本人にとって、西欧の学問を以前から概念思考の道具であった漢語を媒介として漢学の素養に接ぎ木することはそれほど困難なことではなかった。これに対し、日本的な「情」（なまけ／じょう）は古くから「やまと心」の意識とともに実感されており、柳北の言う「人ト生レシ者」の「情」の普遍性はある程度まで認めるにしても、その具体的有り様は古代から中国的・漢学的「情」との間に大きな溝が意識されていた¹⁶。この溝は、『詩経』大序をもじりつつやまとことばに置き替えた『古今和歌集』仮名序にも如実に見てとれる。前者が「情」↓「志」を表す「詩」を儒教的人倫の教化手段となし、「先王是ヲ以テ夫婦ヲ経シ、孝敬ヲ成シ、人倫ヲ厚ウシ、教化ヲ美トシ、風俗ヲ移ス」と述べるところで、やまと歌について語る紀貫之は「男女の仲をも和らげ、猛き武人の心をも慰むるは、歌なり」¹⁷とあくまで和歌の情念的効用を説いている。「齊家」の大本としての「夫婦」や「孝敬」にはまったく触れず、ただ「男女の仲」に焦点を当てるのである。ここにはもちろん、歌垣や妻問婚など古代の現実であった母系的婚姻慣習が大きく関与している。しかし、この後に成立したとされる紀淑望の真名書がやまと心を再び漢文に翻訳し直したとき、「化」人倫。「和」夫婦。「莫」宜於和歌¹⁸。として「男女の仲」が消え「人倫」と「夫婦」が復活するのを見れば、漢文脈が古代からもっていた儒教倫理的拘束の強さが窺われるだろう。

4. 『花柳春話』の「情」

『花柳春話』の漢文直訳体が語る「情」は、リットンの西欧的「情」を才子佳人小説―江戸人情本的「情」に読み替えていながら¹⁹、そのことをほとんど自覚していないように見える。原作の主人公の恋愛は、長い遍歴の後に最初に恋に落ちた女性へと再び辿り着く才子佳人小説の典型とたしかに多

くの共通点をもっている。しかし、小説の眼目は観念的な夢想家マルトラヴアースが社会化を果たすまでの精神的な自己形成過程を描くことにあり、アリス以外の女性との恋愛は彼の人生遍歴と自己認識の進展段階を示す一種の里程標のようなものである。これらの恋愛は西欧の文化伝統が育んだいくつかの典型を示している。まず富裕市民階級の主人公と下層の娘アリスとの身分違いの恋、それからヴァンタドル夫人との宮廷風不倫恋愛（ここでフランス人が選ばれているのは、フランスがこの恋愛の型を代表する国だからである）、最終的には挫折するが貴族レディ・フローレンスとの結婚をめざす恋愛、そしてインセスト・タブーの絡む恋愛。いずれの恋にも障碍があるが、フローレンスとの恋愛が十九世紀中産市民社会にほぼ定着していた恋愛↓結婚のパターンに最も近く、恋愛を媒介として（すなわち当事者の意思を尊重して）、多くは富裕中産層が貴族と結び付く上昇婚のケースもたしかに存在した。しかし結末において主人公が結婚相手として選ぶのが、当時の社会で最も不可能と思われたはずのアリスであるのは、俗世を嫌う彼が、俗世にあつてなお（自然児）たりうる彼女の稀有の本性に惹かれてのことであり、ここにはこの小説のいかにも西欧的な観念性が現れている。西欧的「情」*passion*は古典古代から長く哲学的考察の対象となってきたが、理想家マルトラヴァアースの「情」は、それ自体観念的に意味づけられた「情」として、ここに描かれた恋愛を彼の精神的成長段階を写す鏡と化すのである。

原作の観念的洋文脈は明らかに丹羽の理解を超えていたように見える。訳文に所々挿まれる訳者のコメントは、西洋的な男女の「情」が東洋的なそれと明らかに異なり、なにがしかの説明を要したことを証しているが、それは明確な自覚の上での作業ではない。というのも結末のコメントで丹羽は、この書を翻訳した理由を次のように述べているからである。「訳者云ク牢度倫ロードリットン氏小説二十二巻ヲ著シ細カニ古今ノ人情ヲ探ツテ遠近ノ異俗ヲ記シ一読以

テ世ノ悲歎正邪ヲ詳知スルニ足ラシム。而シテ我朝ノ為永春水ノ著ニ係ル梅曆等ノ如ク読者ヲシテ徒ラニ痴情ヲ情発セシムル者ニ非サルナリ。且ツ其書概ネ実跡アル者ニ基キ彼ノ空中ニ樓閣ヲ描キ強ヒテ有ル可カラザルノ人情ヲ写出スルノ類ニ非ラズ。故ニ其言切ニシテ其情深シ。是レ乃チ其書名、人口ニ膾炙シテ遂ニ我邦語ヲ以テ之ヲ翻訳セシムルニ至ル所以ナリ。（……）」丹羽はリットンの小説を為永春水に代表される人情本的「情」及びおそらくは才子佳人小説や馬琴を示唆する荒唐無稽な読本的世界の「情」と比較して、西洋の優越をその描写法と写実性に見ている。この言葉は後の坪内逍遙の『小説神髓』（明治十八年）の主張をほぼ先取りするもので、逍遙が『小説神髓』中で『花柳春話』に言及し、春水・馬琴にも触れていることから推測すれば、彼の論は丹羽の訳者言から出発し、それを発展させたものと考えられる。しかし、丹羽はここで「情」を描く小説の優劣について語っているのではなく、柳北同様に「情」そのものに彼我の差があると述べているわけではない。ところが、彼は主人公の恋愛を描写する訳文に「青雲の志」と「不義」、「情」と「義」の葛藤という東洋的トポスを導入し、西洋的恋愛の系譜を見事に自国に馴染みの文脈に換骨奪胎している。そして翻訳の物語はまさしく才子佳人小説―読本―人情本的にバタバタとすべての難問が一挙に解決する体の大団円を迎える。そこに付された挿絵もまたこれに唱和し、恋愛関係にある二人を「才子」「佳人」と紹介することによって東洋的文脈に引き込む。このような操作・改変は長編の原作を抄訳するための方便でもあったが、やはり原作に対する丹羽自身の解釈を、つまり明治初期日本人としての西欧理解の限界を、そのまま反映したものであつたらう。西欧的「情」を「我邦語」の漢文直訳体に翻訳する作業を進めながら、彼は自から慣れ親しんだ和漢の文脈に思わず身を乗り入れていく。原作の風景描写は悉く漢詩文的漢語に置き替えられて東洋的世界を現出し、そこに対句表現が頻出するの

も、この世代の知識人の漢文脈的拘束を如実に示すものと言えるだろう。

5. 『新花柳春話』の結婚観

前述したように、坪内逍遙は『花柳春話』を知っていただけでなく、この翻訳に大きな影響を受けた一人だった。彼は『小説神髓』（明治十八年）の中で、丹羽の訳者言に述べられた西欧小説の写実的優越性の論拠を敷衍し発展させているが、その影響は単なる小説理論にとどまらず、開化の時代の結婚に対する彼の関心の有り様にも及んでいる。丹羽自身が意図していたかどうかは措くとして、この小説には恋愛を介して人生を遍歴し最終的に著述家として社会に有用な人物となる主人公の傍らに、結婚を、あるいはむしろ結婚生活を満ち足りた人生に不可欠の基軸として讃える人物が配されている。主人公の親友で幸福な結婚生活を営むモンテイン³は、『花柳春話』の大団円近くでこう語っている。「君如シ良配ナケレバ心常に一ナラズ或ハ都下ノ交際ニ飽キ又ハ田舎ノ隘陋ニ倦ミ偶々外国ニ遊行シテ一時歓娛ヲ極ムルニ似タレドモ亦之ヲ倦厭シ西走東奔遂ニ暇日ナカラントス。蓋シ是良配ナクンバ君ノ心意常ニ一ナルベカラズト思フ所以ナリ」。恒心（「一ナル」心）は儒教的現実主義に根ざした恒産によってではなく、プロテスタント的結婚の理想たる「良配」（良き伴侶）によって培われるとするこの主張は、「青雲の志」を遂げようと夢見る明治初期の、多くは旧士族出身の書生知識人に新鮮な驚きを与えたに違いない。維新の変革によって恒産（禄）を失った彼らはまさしくそれを目ざして官途に就き、それによって士大夫の恒心の基盤を得ようと考えていた。結婚は一般にこの時点で初めて問題になり得たが、それは家を維持するために必要不可欠の制度であり、恒心と直接関係づけ得るものではなかった。これに対し、『花柳春話』に語られる西欧型の結婚は（理念として）「良配」すなわち夫婦の愛情の絆を重視し、それこそが恒心を支える最も大

きな力であると説いていたのである。この結婚にはもちろん、近代中産市民層にふさわしい生活を維持するための恒産（財産）あるいはそれに代る手立（職業）が前提とされていた。つまり「良配」を得るには恒産が不可欠だったが、中産の振舞い^{デコレーション}を反映するプロテスタント的結婚イデオロギーはこの事実³に正面切って触れることは少なかった。したがって、この新思想が流れ込んだ明治初期に、西欧的結婚の精神面のみが強調され、下部構造が見逃されがちだったのは無理からぬことでもあっただろう⁴。そしてだからこそ、この新しい結婚観ははまだ恒産を持たない若い世代にとりわけ大きなインパクトを与え得たのではないかと思われる。

これに続けてモンテインがベントドア夫人の近況について語る言葉にも、親が決めた結婚の不幸と有るべき姿が描き出されている。「曰ク彼レ幼少ニシテ父母ノ命ニ由リ早く婚婦ノ約ヲ為セリ。身已ニ定リテ復タ之ヲ破ルベカラズ。故ニ婚姻ノ後チ常ニ快^{アハラク}憂愁ニ沈ンデ毫モ歡樂ノ思ヒアラズ。抑、夫婦ノ道ハ父母ト雖モ之ヲ妨グ可カラズ」⁵。フランスの上流・富裕階級の結婚が近代においても家門を優先する両親の支配下にあり、それが不倫愛の土壤を培っているという説はイギリスにもよく知られていた。丹羽の翻訳は当事者相互の意思によって結ばれる婚姻関係とその営みを「夫婦ノ道」と表現して東洋的社会規範を強く意識させながら、それが「父母」（親）の意思に優先されることによって、明治の現実たる儒教的家父長制度の枠組みを脱する新時代の結婚観を呈示している。ここでの「道」は既成の道理・条理・倫理を指すよりむしろ、ともに歩むプロセスが含意されており⁶、それが原作の教養主義的自己形成Bridungの理念と響き合っており、それが原作の親・人生観の理想を自身の問題として手繰り寄せる機縁となったのではないかと思われる。こうして、漢文脈への翻訳はその基底をなす東洋的倫理観を

媒介としながら、知識人読者層が西欧（洋文脈）の事象を日本的現実に沿って受容する恰好の手段を提供したのである。

この事情はまた、前述した「青雲の志」と「不義」という用語にも当てはまる。リットンの原作では明らかに、古典古代以来ヨーロッパ思想の系譜に常に存在した二つの生き方のタイプ（思索的生 *vita contemplativa* と活動的生 *vita activa*）が問題になっており、生来世間を厭い世俗的喧騒を避けて静かに思索に耽ることを好むマルトラヴァースが、ゲーテの『ヴィルヘルム・マイスター』の思想に倣い、世俗にあつて有用な人間として生きることを志す自己形成と社会化の過程が小説全体のテーマになっている。これに対して、丹羽のマルトラヴァースは自由民権運動が高まりを見せる時代背景を反映し、恋人も含め様々な人物から「青雲の志」（東洋的公領域への参加意志）を抱くよう鼓舞される人物であり、したがって彼の恋愛は漢文脈的規範意識に絡め取られた「情」と「義・理」の葛藤として語られることになる。しかし、この葛藤の克服過程はやはり自己認識の深化や人間的成長を物語っており、恋愛遍歴の末に辿り着くアリスとの結婚はモンテインの結婚観に支えられて新時代を告知するものとなっているのである。

6. 『花柳春話』の影響——結びに代えて

『花柳春話』が含むこのようなモチーフに鑑みれば、逍遙がこれを西欧小説のモデルとして読み、すぐさま自身の造形した主人公に自由結婚の問題として反芻させたのは大いに理由のあることだった。丹羽が「情」の描写技法に認めたこの小説の優位性を、逍遙は『小説神髓』において理論的に発展させたが、翌明治十九年に発表された『新妹と背かぐみ』ではその影響が新世代の結婚のあり方そのものへの問いとなつて内面化している。それは、官員として立身コースに乗った主人公水沢達三が、魚屋の娘お辻との恋をアリスと

マルトラヴァースになぞらえて結婚し、見事に失敗する物語である。書生の水沢は夢のなかでの母親の訓戒に一時は思うところがあつて下宿を替え、淡い恋心を抱いていたお辻の前から姿を消す。その後の精進により学業を成就した彼は、高級官僚の娘お雪に恋心を抱くが、彼女が自分に気がないと早合点し、お雪との結婚を目論む友人の奸計にかかつてお辻との結婚を決意する。

その際、彼は『花柳春話』の主人公に自らをなぞらえ、「お辻が為人のあはあはしき。進退挙止の蓮葉はすは気なる。いくらか此アリスの為人に似たり。さハあれ其真情の切なること争でかまたアリス女に劣らん。よしや学識が乏しければとて。教へ導きなバ人並にハなるべし。アリス女の稚蒙なる。神といふ事だに解せざりしを。「マルトラヴァース」ハ教え導き。竟に一佳人となしたるならずや」と考えるのである。語り手は水沢の結婚生活の失敗を、この決意の軽率さ、そして結婚後の忍耐の不足など、『花柳春話』から正しく学び得なかつた点に見ている。マルトラヴァースとアリスの結婚は、彼らの最初の結びつきから長い時間を経て、主人公の精神的な彷徨と遍歴の後に実現したものであり、教養小説的自己形成の一つの到達点であるのに対し、水沢は若い彼らの第一段階の恋にのみ目を止めて、アリスを「教え導」くこともなく、自身成長することもなく、夫婦間の誤解と猜疑を募らせていく²⁷。逍遙が教化の意図を込めて造形した主人公の自己形成能力と人間的成長の欠落²⁸、これこそがまさしく才子佳人小説や読本、人情本など東洋的小説稗史の主人公に共通する特徴でもあった。

逍遙が『花柳春話』から受け取ったモチーフを明治十年代末の青年層の「情」と結婚の問題として敷衍し小説化したとすれば、この翻訳小説の出版直後に俄に興隆した政治小説は、過激化する自由民権運動を背景に、本来は個人の自己形成・成長をめぐつていたモチーフを日本という未熟な国家の政治的成長の問題に読み替えるところから出発したように見える。政治小説の

嚙矢とされる戸田欣堂の『漢情海波瀾』(明治十三年)以降、明治二十三年の憲法發布と国会開設をめざして近代国家建設への展望や方策に関する議論が様々の立場から小説化されたとき、それはしばしば日本国と民権を暗示する男女の結婚問題として寓意的に物語られた。この結婚の成否は当事者男女の成長如何にかかっており、結婚は自己形成の諸段階を経て初めて到達可能な一つの目標として呈示されていた。この過程には、マルツラバースが体験したような恋愛や誘惑、欺瞞、陰謀など様々の波瀾要因が待ち構え、小説稗史特有の娯楽的要素(通俗性)にも欠けていなかった。またこれらの政治小説のなかには、恋愛を介して、女性を介して男性主人公が成長するというヨーロッパ的な恋愛観の影響も跡づけられる。こうして、リットンの『マルトラヴァース』が呈示した社会化をめざす個人の自己形成・成長のモチーフは、漢文脈に媒介された『花柳春話』を通して、あるいは近代化を目ざす青年国家日本の自己形成・成長の問題に、あるいは近代青年の自由結婚をめぐる葛藤に読み替えられ、異国の土壌に原作者が予想もしなかった形で確かな根を下ろすことになった⁹。

* 引用文の旧漢字は新漢字に改めた。

¹ Edward George Bulwer-Lytton (1803-73) 十九世紀半ばの作家・政治家。日本におけるリットンの翻訳紹介は明治十一年の『花柳春話』に始まって明治二十年代半ばまで大いに盛んだった。

² 柳田泉『政治小説研究』上、春秋社、一九三五年。

³ リットン自身が『アーネスト・マルトラヴァース』の再版(一八四〇年)序にこの作品の執筆中ゲーテの『ヴィルヘルム・マイスター』が念頭にあったと述べている。当時のイギリスではカーライルを中心にドイツ・ロマン派が影響力をもっていたことも考え合わせるべきだろう。『花柳春話』は四編と「絵入り付録」から成る。

⁴ 明治二十年代に〈翻訳王〉と言われた森田思軒は、二十六年に出たリットン作／益田克徳訳『夜と朝』の序文に「先二我那小説ノ趣向将ニ一変セムトスルヤ。織田氏

(丹羽氏)訳スル所ノ『花柳春話』之カ嚙矢ヲナセリ。」と述べている(続明治翻訳文学全集・翻訳家編2『福地桜痴・益田克徳集』大空社、二〇〇三年、所収)。

⁵ 才子とは本来公的領域を目ざす士であり、結婚とは公的領域の名士たち相互の家の結合に他ならなかったから、才子の私的「情」とは無関係だった。つまり才子佳人小説が大団円を迎えるとすれば(この傾向は明清代になると非常に強まる)、この社会的現実を超越した夢物語であり、だからこそ世間に歓迎されたのである。

⁶ 『東京新繁昌記』(明治七年)は幕末の寺門静軒著『江戸繁昌記』からヒントを得て明治初期の開化風俗・世相を描き大当たりをとった。三木愛花「服部撫松傳」(成島柳北 服部撫松 栗本鋤雲集)明治文学全集4、筑摩書房、所収)によれば、福沢諭吉著『西洋事情』『世界図説』に次ぎ、一万部から一万五千部内外を売ったという。また撫松には洋学知識がなかったが、その「翻譯」と銘打った訳書さえ登場している。

⁷ 山敷和男『論考服部撫松』(現代思潮社、一九八六年)、十四頁。山敷によれば「公用人」は東京詰め藩の留守居役で「遊ぶに事欠かない」楽な仕事であった。

⁸ 『花柳春話』の文体については、米川明彦『漢花柳春話』の漢語の語形、国語語彙史研究会編『国語語彙史の研究5』和泉書院、一九八四年、所収/同『漢花柳春話』の漢語『国語学』一四〇集、一九八五年、を参照。米川は、『増補新令字解』(明治三年)と『言海』(明治二十二年)に収録された官庁実務的あるいは「普通語」的漢語と比べ、漢詩文に用いられる難しい漢語の多い漢文直訳体であり、「読者を知識人においていた」ため「使用された漢語もそのレベルにあわせてものと推察」している。

⁹ 丹羽の経歴、人物、及び『花柳春話』翻訳に関わる事情は石井研堂著『改訂増補明治事物起原』(日本評論社版『明治文化全集』別巻、一九六九年、六五―七三頁、初版は明治四十一年)及び柳田泉『花柳春話』訳者織田純一郎伝(旧姓丹羽氏)、『織田純一郎の「素生」及び「海外留学事情」について』(前掲書『明治初期翻訳文学の研究』に所収)による。丹羽が官職に就かなかった理由については推測に止まるが、遊蕩的性格が禍いして果たせなかったようである。

柳北は明治五年から六年にかけて東本願寺法主に随行して欧米を漫遊し、この記録として『航西日乗』を残している(明治十四年『花月新誌』に連載)が、出入り九ヶ月ばかりの旅行中パリには六ヶ月あまりも滞在しており、この飲の都の印象が彼の欧米観全体に影を落としていた。柳北がパリのゲイティ座について記した感想には「衆妓ノ蜻蛉ノ舞ヲ為ス、本邦ノ胡蝶ノ舞ト相似テ艶麗人ヲ驚カセリ」とあり、また小デユマの『椿姫』に大きな関心を寄せていることから(前田愛『成島柳北』朝日評伝選11、一九七六年、一八三頁)、「彼我の情」の相似性を遊里・花柳世界に見ていることが分かる。これに対して丹羽が数年間にわたって留学した十九世紀後半のヴィクトリア朝のイギリスでは、ピューリタンの市民精神が花柳界を裏社会に追いやり、パリ

のように社会の前面に顕れ出て人目を惹くことはなかった。

¹ 森も指摘しているように、妾は遊里出身者が多く、わずか一年二年で関係を解消する場合も多かった(『妻妾論』一五、『明六雑誌』掲載)。

² 明治三年の政府最初の刑法典『新律綱領』は従来の慣習に基づいて妻妾共に夫の配偶者とし、妻も妾も夫の二等親(夫との距離を同等とする)と位置づけたが、その後戸籍法が施行されて妻と妾の子の扱いについて様々な問題が生じ、世論の影響によって、明治十三年公布、十五年実施の「旧刑法」で妾は法律上存在しないことになった(高柳真三「明治初年に於ける家族制度改革の一研究―妾の廃止―」日本法理叢書第三号、一九四一年/野崎衣枝「森有礼の家族観―『妻妾論』を中心として―」、福島正夫編『近代日本の家族観』V、福島正夫編『家族政策と法』7、東京大学出版会、一九七六年、所収)。畜妾の慣習は現実にはその後も長く行われ、明治初年から二十年代まで妾を表す「権妻」という言葉が大流行して小説にもしばしば登場している。

³ これは柳北によっても盛んに風刺され嗟嘆の対象となっていた明治東京の新風俗でもあった。江戸から東京への改名は、旧時代の風流才子の存在を急速に排除しながら、遊里を薩長田舎侍から成り上がった人々の「風流を知らない」遊びの世界に変貌させたからである。前田愛「成島柳北」朝日選書、参照。『朝野新聞』紙上でも彼らの醜行はしばしば辛辣な皮肉の対象となっている。

⁴ 森有礼「妻妾論」四、『明六雑誌』第二十号(明治七年十一月)、「女子人ノ妻ト為リ家ヲ治ルヤ其責既ニ輕カラス、而シテ又ソノ人ノ母ト為リ子ヲ教ルヤ其任実ニ難且重ト云フヘシ。」/中村正直「善良ナル母ヲ造ル説」同誌第三十三号(明治八年三月)、「男女ともに」一様ナル修養ヲ受ケシメ、其ヲシテ同等ニ進歩ヲナサシムベシ。純情ナル婦人ハ純清ナル男子ニ伴ナハザルベカラズ。中村は男女の同等性を強調しているが、夫婦となる男女の「情」の相互性には言及していない。他方『明六社』の演説会から大きな影響を受け自由民権運動に参加した植木枝盛は、明治十年代後半になって男女同権の革新的な婚姻観・家族観を展開する。明治二十年に土陽新聞に連載した「婦人女子社会の交際」で彼は「東洋の婚姻は真に相思ひ相慕ふ者が其意に任せて之を遂ぐるにあらざり」(第二二八八号所載、植木枝盛『家庭改革・婦人解放論』外崎光弘編、法政大学出版局、一九七一年、所収、一四〇頁)として、その裏に西欧型の恋愛結婚の理想を含蓄している。植木にとって女子教育は自己を陶冶しふさわしい伴侶を選ぶために必要とされており、母役割が主眼ではない。

⁵ 『花柳春話』は日本における西欧小説の最初の翻訳ではないが、西欧的男女関係と恋愛を描いた小説の最初の翻訳であり、よく売れたことでも画期的だった。

⁶ 洋文脈的「情」を輸入した近代において、日本的(和文脈的)「情」が漢文脈的「情」とどのような関係にあったのかについては、今後稿を改めて考察したい。

⁷ 古今和歌集「仮名序」、『古今和歌集』岩波版新日本古典文学大系5、四頁。

⁸ 古今和歌集「真名序」、同上、三三八頁。

⁹ 中国の明末清初の才子佳人小説は江戸後期に大量に輸入されており、初期の為永春水もこのジャンルの中国小説に関心を持っていた。閻小妹「日本における才子佳人小説の受容について―渡来才子佳人小説目録―」、読本研究の会編『読本研究新集』、翰林書房、一九九八年、所収/同著「才子佳人小説の類型化について」、『中国古典小説研究』第6号、二〇〇一年、所収、を参照。

¹⁰ 例えばルソー『新エロイーズ』のジュリの結婚はその典型例である。

¹¹ 山本芳明(『アーネスト・マルトラヴァース』・『アリス』論)『花柳春話』の原書の世界とは何か?、『日本近代文学』31集、一九八四年)の指摘するアリスのZenoの子としての性格付けは、自然に真善美を見るロマン主義的特徴であり、必ずしもルソーだけではない。また、アリスは主人公に再会して結婚する前にある地主の後妻となっており、このステップが読者に彼女の上昇婚を許容し易くしている。

¹² 山本芳明、前掲論文が指摘する通りである。

¹³ モンテイン夫妻はこの小説を通して満ち足りた結婚生活の鑑として描かれており、夫はこれをベースに重要な政治的使命を果たし、妻は「凡人間ノ幸福婚姻シテ一家ヲ成スヨリ大ナルハナシ」(第二編第二十五章)と核家庭的家庭生活を礼賛している。

¹⁴ 丹羽は第一編第五章の訳者言で「欧州ノ風俗ハ専ラ利ヲ先ニシ美且ツ才アル女子ト雖ドモ財産ナキ者ハ概ネ嫁スル能ハズ」と述べている。しかし、マルツラバースはこの一般化から外れた、利に動かされない人物として造形されている。

¹⁵ 結婚に際して「父母ノ命」より娘自身の選択を優先すべきだとする考え方は、第二編第二十七章で既にアリスの心情に即して述べられている。

¹⁶ 例えば森有礼の「妻妾論」は「夫婦ノ交ハ人倫ノ大本ナリ。基本立テ而シテ道行ハル、道行ハレテ而シテ国始テ堅立ス」から始まり、「夫婦ノ交」に同等性を持ち込みながら、論の全体の枠組みは儒学の修身齐家治国平天下思想を堅持している。

¹⁷ 『妹と背かゞみ』の解釈をめぐっては、高橋修『妹と背かゞみ』論、『花柳春話』を軸として、上智大学『国文学論集』18、一九八五年、所収、を参照。ただし、逍遙のこの小説のテーマは『花柳春話』が明治十年代の政治小説に与えた影響とも密接に関連しており、通時的に分析する必要があるだろう。

¹⁸ 逍遙は『小説神髓』において小説神史の教化的側面、すなわち「人間を警誡して其内外の体裁をバ改良するの力」を認めている(上巻、「小説の裨益」を参照)が、教養小説的な自己形成・成長のモチーフについては何も触れていない。彼はおそらく『花柳春話』から学んだこのモチーフを水沢の人物造形に際して無自覚に参照している。¹⁹ 政治小説の『花柳春話』からの影響については、稿を改めて論じたい。